

(二〇二〇年度)

# 1 国語問題 (六〇分)

(この問題冊子は19ページ、三問である。)

## 受験についての注意

- 一、試験監督者の指示があるまで、問題冊子を開いてはならない。
- 二、試験開始前に、試験監督者から指示があったら、解答用紙の右上の番号が自分の受験番号と一致することを確認し、所定の欄に氏名を記入すること。次に、解答用紙の右側のミシン目にそって、きれいに折り曲げてから、受験番号と氏名が書かれた切片を切り離し、机上に置くこと。
- 三、試験監督者から試験開始の指示があったら、この問題冊子が、右に記したページ数どおりそろっていることを確かめること。
- 四、筆記具は、HかFかHBの黒鉛筆またはシャープペンシルに限る。万年筆・ボールペンなどを使用してはならない。時計に組み込まれたアラーム機能、計算機能、辞書機能を使用してはならない。また、スマートウォッチなどのウェアラブル端末を使用してはならない。
- 五、解答は、解答用紙の各問の選択肢の中から正解と思うものを選んで、そのマーク欄をぬりつぶすこと。
- 六、マークをするとき、マーク欄からはみ出したり、白い部分を残したり、文字や番号、○や×をつけたりしてはならない。また、マーク箇所以外の部分には何も書いてはならない。
- 七、訂正する場合は、消しゴムでいねいに消すこと。消しきずはきれいに取り除くこと。
- 八、解答用紙を折り曲げたり、破ったりしてはならない。
- 九、試験監督者の許可なく試験時間中に退場してはならない。
- 十、解答用紙を持ち帰ってはならない。
- 十一、問題冊子は必ず持ち帰ること。

一 次の文章を読んで、後の問に答えよ。

顔と身体とは「かくれんぼ遊び」をしている、と指摘するのはE・ルモワーマルツチオーニである。「衣服で身体を覆うことは、顔にコミュニケーションの優位を譲ることであるが、仮面は身体をふたたびコミュニケーションの道具にする」と、『衣服の精神分析』のなかで彼女は言う。衣服で身体を覆い隠すことによってひとはコミュニケーションの中継地点(あるいは「人間の」な意味が凝集する場所)を顔面へと凝集させるが、仮面で顔面を覆うことによって(あるいは顔面に顔料を厚く塗りこめることによって)顔面の意味作用が消去され、それと反比例して、身体<sup>1</sup>の各部位がその減却された意味作用を回復すること<sup>2</sup>である。そして後者の手法を様式化したのがパントマイムだというわけだ。われわれの身体表面における人称化の動性と脱人称化の動性、あるいは、だれかになることとだれかでなくなること、この二つの契機が顔と身体<sup>3</sup>のあいだで交差する。

ここで、仮面<sup>3</sup>を装着することによって顔面の意味作用を消去ないしは減却するというのは、顔を偽ることでない。たしかに、「顔を偽る」、あるいは一般に「顔を作る」という言葉があるように、われわれは顔を偽造し、それを遮蔽幕<sup>しほへいまく</sup>として顔の背後に隠れることができる。つまり、「顔を偽る」という表現は、顔面の「向こう側」があつて、それとの関係が顔の「真偽」を決めるのだという考えを前提している。顔の「向こう側」(だれかあるひとの「自己」、あるいはそのひとの心情や内面?)が顔の真偽を決める、つまり顔には「素顔」と「にせの顔」「偽りの顔」があるのだとするならば、顔ははじめから見かけ、つまりは仮面にほかならないことになる。ひとが顔をマスクと呼ぶのも、理由のあることなのだ。しかし、すぐれて顔といふことのできる特権的な顔が、ほんとうに存在するのだろうか。だれかある人格がそこにありありと現前しているような顔とはどういう顔なのだろうか。あるいは、そこに「本人」のメッセージが出ている場、あるいは「主体」がそこからのぞける穴としての顔とは？

実際、われわれはほんとうにだれかあるひとを見ることができのだろうか。もしできれば、どれほどかこころが休まるはずだ。しかし事實は逆で、われわれはなんとか他人を見よう、せめてその存在を視覚的にとらえようとして、彼の身体表面に視線をやるのだが——とはいえ実際には、他人の視線によって追い払われ、すこすこ引き下がることのほうがはるかに多い

——、その視線が着地すべき地点が分からぬまま、視線をうろうろ漂わせるばかりだ。

ところで、ほんとうの顔、偽りの顔という言い方は、顔の本来あるべき状態、つまり「素颜」という観念を前提している。ところことは、「素颜」という観念を解除すれば、仮面ないしは覆面イコール偽りの顔という等式も崩れるはずだ。そしてそのためには、そもそも「顔の向こう側」というものがほんとうに存在するのか、そのことがまず問われねばならない。

4 《顔》はわれわれの社会では、つねに「だれかの顔」である。5 あるひとがだれであるかは、最終的には顔の同一性によって確認される。身分証明書や受験票の顔写真、行方不明者・身元不明者・指名手配者の照会ポスター……。もちろんこれらの顔写真はだれかの「素颜」を撮ったものであって、仮面を被ったもの、「素颜」を覆い隠すほどに厚化粧を施したものであってはならない、とされている。しかし、「素颜」というのも、ほんとうはそのようなものとして自他のあいだで了解されている（顔）ことではないのか。そもそもだれかの「ありのままの顔」といったものが存在するのだろうか。

ところで、ここに、クリフォード・ギアツが普遍というものをどうとらえるかという文脈で述べたおもしろい議論がある（「反・反相対主義」）。概要だけかいつまんで紹介すると次のようになる。

噛む、噛みつく、といった行為は、人間にとって格別不自然なものではない。しかし、他人の身体の一部を食いちぎらんばかりに激しく噛み、しかも噛みつくことそれ自体に密やかな快感をおぼえるとなると、それは、サディスティックな行為、それもおぞましく「倒錯的な」行為だとみなされる。その理由はふつう、そうした行為が人間性、つまり「人間の自然」を逸脱しているから、あるいはそれに悖るからという点に求められる。しかしもしそうだとすると、「サディズムはあまりに深く噛みすぎないかぎりは自然な行為である」という理屈になる。逆にあまりにきつく噛みすぎると、人間にとって自然なものがそのまま自然に反するものへと裏返ることになる。正常／異常にかぎらず、善／悪、健康／病いについても、それを「人間の自然」に適っているか否かという視点から見てゆくと、かならずこうした奇妙な議論にはまり込んでしまう、というのである。

われわれの考えでは、「噛む」という行為とともにこうした議論に格好の例を提供するのが、化粧という行為である。たとえばプラトン（＝ソクラテス）の化粧論。弁論術批判という文脈においてであるが、プラトンは『ゴルギアス』のなかで、「身体の

世話」にかかわる技術として医療と体育術があるとしたあと、そうした技術にもぐり込んでそれを詐称するものとして、医療における料理法とともに体育術における化粧法を挙げ、それらをきびしく批難している。根拠として提示されるのは、たとえば次のような論点である。

医療のもとには料理法がその仮面を着けてまぎれこみ、おべっかを中心としてしているのは、いま言ったとおりであるが、これと同じようにして、体育術のもとには化粧法という、悪賢くて人をあざむき、低級で卑屈な性格のものももぐりこんでいる。それは、姿態により、皮膚の色となめらかさにより、また、衣装によって人目をあざむき、人々をして自己本来のものならぬ美しさをよそから借りて身につけることに熱中させて、体育術によって得られる自然本来の美しさをなおざりにさせる……。

〔『ゴルギアス』〕

ありのままの美しさ、あるいは「自然本来の美しさ」の凌辱りようじやくという論拠。これは、次のようなかたちでガレノスの化粧術批判においても反復されている。

身づくろいの技術(コスメティック)は医学の一部であり、化粧術(コモティック)とは異なる。化粧の目的は、異様な美を實現することであり、医学の一部である身づくろいの目的は、全身を全くありのままに保つことなのである。したがって、それは自然の美しさとなる。

(O・ブルジュラン「化粧散歩」より)

8 われわれの存在の可視性の変換という同じ一つの行為が、ここでは「自然の美しさ」へのかかわりかたを規準として、身づくろいと化粧へと分割されている。しかし、そのうち何が衛生管理とでもいうべき準医療技術に属し、何が美容という過度の行

為とみなされるのか、その根拠をたどつてゆくと、先のギアツの議論ではないが、その境界線がひじょうに曖昧であることがわかる。ファンデーションは衛生管理を逸脱しているのか否か？ 香水をつけるのは体臭の管理という義務に属するのか、それとも一種の耽溺行為たんにやくなのか？ 整髪は？ 義歯は？ 口紅は？ スカートは？ ストッキングは？ ハイヒールは？

ここでは、コスメティックかコモティックかという相違は、恣意的に設定された境界にもとづいたものでしかないのであつて、問題はむしろ、同じ自然の変換行為のなかでも何を許容し、何を禁止するかという、その分割の規準のうちに、時代のどのような強迫観念に人びとが共同して憑たもられていたのかを読みとることのほうにある。

<sup>9</sup> このようにわれわれの可視性の表面は、一方で、特定の厳密な変換規則によつてくまなく被おほわれている。あらゆるひとが他の可視性との微妙な差異にその存在を賭けている。が、他方で、そうした差異も少し距離を隔てると、ほぼ同一のスタイルによつて編成されているのがわかる。そして服のライン、上下の境目、開口部、髪のカット・ライン……それらが人びとの可視性を囲い、支える共通の透明の枠わく（あるいは檻わづり？）のように見えてくる。可視性はしかし、なぜいつも共同的なかたちで解釈されねばならないのか。そうした共同的な解釈行為は、なぜ可視性を加工・変形する行為となつて発生するのか。われわれはここでむしろそのように問うべきだろう。

<sup>10</sup> 何の加工も変形も施されていないような顔は存在しない。顔の自然性とは一つの虚構であり、それはつねにすでに侵犯されている。問題はだから、顔の可視性はなぜつねに別のものへと変換されねばならないか、あるいは、顔は何に向けて（あるいは、どのような観念に憑かれて）変換されるのか、という点にあるといえる。

（鷺田清一『顔の現象学』）

〈注〉 ガレノス：紀元後二世紀の医学者

問一 傍線部1について、「身体の各部位がその減却された意味作用を回復する」とは、どういうことか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 身体それぞれの部位が、顔の露出によって減らされたコミュニケーションの力を取り戻すこと。
- b 身体それぞれの部位が、顔のもつ「人間的」な意味によって減らされた個性を取り戻すこと。
- c 身体それぞれの部位が、服を着ることによって減らされた物質性を取り戻すこと。
- d 身体それぞれの部位が、衣服で隠すことによって減らされた身体の美しさを取り戻すこと。

問二 傍線部2について、「後者の手法を様式化した」とは、どういうことか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 顔面のコミュニケーション優位を取り除き、顔面以外の身体コミュニケーションに新しい意味をもたせる方式をつくること。
- b 顔面の意味作用を消去し、顔面以外の身体の意味作用を一つの表現のかたちにすること。
- c 顔面のもつ「人間的」な意味を剝奪し、顔面以外の身体が「人間的」な意味を持てるようにシステムをつくること。
- d 顔面へ注目することをやめさせ、顔面以外の身体が注目されるような一つの形式を作ったということ。

問三 傍線部3について、このように筆者が考える理由は何か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a 仮面をかぶることは「素顔」を隠すことであるが、顔を偽造して自らをよりよく見せるような考えは持っていないから。

b 仮面をかぶって顔面の表現能力を使わないようにすることは、「自己」を保持することで偽る行為ではないから。

c 仮面をかぶらないと顔面の意味作用は消えることがなく、顔を偽ること以外の表現も表出してしまうものだから。

d 仮面をかぶらなくても、そもそも顔には「素顔」と「向こう側」の顔があると想定されており、仮面をかぶったようなものだから。

問四 傍線部4は、どういうことを言っているのか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a 〈顔〉というものは、社会の中では特別意識されているものではなく、個人とは別の機能をしている。

b 〈顔〉というものは、社会におけるコミュニケーションの最高の武器であり、自己に密着したものである。

c 〈顔〉というものは、われわれの社会においては特定の個人を表示するものである。

d 〈顔〉というものは、われわれの社会でははじめから見かけであり、「素顔」と「にせの顔」の二面を持つ。

問五 傍線部5は、どういうことか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a あるひとがだれであるかは、身分証明書などの写真と「ありのままの顔」とを照合して認知している。

b あるひとがだれであるかは、「素顔」と「ありのままの顔」が同一であることに基づいて認定される。

c あるひとがだれであるかは、厚化粧などの「偽りの顔」から「素顔」を抽出して確認するものである。

d あるひとがだれであるかは、ある顔と「素顔」とを一致させることをもって認識するものである。

問六 傍線部6について、「奇妙な議論」とは、どういうものか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a 「人間の自然」という規準から見ると、サディズムは深く噛みすぎないかぎり自然な行為となり、強く噛むとサディズムになるように、反転性が認められるということ。

b 「人間の自然」という観点は、噛む強さによってサディズムにも普通にもなるという点において倒錯的な見方であるということ。

c 「人間の自然」という見方には、噛むことを自然とする考えが含まれており、強く噛むことだけをサディズムとするのは普遍性を欠くということ。

d 「人間の自然」という考え方には、極端なものを排除する傾向があり、強く噛むことは倒錯と認定されるということ。

問七 傍線部7について、プラトンが「化粧法」をこのように悪く言う理由は何か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a 化粧法が、体育術によって実現させる皮膚の色の美やなめらかさは、一過性のものであるから。

b 化粧法が、体育術の授けるべき人の自然な美しさを、先まわりして教授しているから。

c 化粧法が、体育術によって得られる人々のもともも持っている美しさを、大切にしていないから。

d 化粧法が、体育術の一部であると擬装して美を伝授しているから。



問八 傍線部8について、「われわれの存在の可視性の変換」とは、どういうことか。次の中から適切でないものを一つ選べ。

- a わたしたちが自らの存在を、自然の美しさにしたてあげてゆくこと。
- b わたしたちが自らの身体を、他者に見られることを前提として加工すること。
- c わたしたちが自らの存在を、物理的見地からとらえて美しくしてゆくこと。
- d わたしたちが自らの身体を、化粧によって美的存在にしてゆくこと。

問九 傍線部9について、「特定の厳密な変換規則」とは何か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a ある時代にある個人によって設定された境界。
- b ある時代に存在する人々の趣向の微妙な差異。
- c ある時代に特有の強迫観念によって導き出されたおぞましきルール。
- d ある時代に人々の共同性によって成立している同一の様式。

問十 傍線部10について、このように筆者が考える理由は何か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 顔は、医療技術の発達と連動して変化するから。
- b 顔は、美しさをめざして変形させられる運命をもっているから。
- c 顔は、自然本来のままを保とうとしても成長、老化で変化するから。
- d 顔は、時代や文化のもつ共同性によって影響を受けるから。

二

次の文章を読んで、後の問に答えよ。(設問の関係で原文のルビを省いたところがある。)

問ひて云はく、「日本」と名づけられたる故はいかに。

答へて云はく、万国ごとごとく光を仰ぎて、めぐみあまねき大御神の御国なる故に、「日の本つ国」といふ意なり。また西蕃諸国より見れば、日の出づる方にあるも、おのづからその意にかなへり。されば、むかしもろこしへ御使を遣はしし時に、「日出処天子、致書日没処天子」と書かれたるよし、『隋書』『資治通鑑』などに載せたり。これ推古天皇の御世のことなり。また右に引ける『唐書』の趣きも同じ意なり。

これらのこと此方の史には見えぬ。後の物に書けるはみな彼を見て書ければ、引くべきにあらず。大方もろこしの書に此方のことをいへるは、いづれも誤りのみ多くて、さらに証に引くべくもあらねど、また事によるべきなり。これらのことはもと此方よりいへることを、そのままに書き伝へたるものにて違ふことなかるべし。それをかへりて此方には伝へ失へるなり。

さて右に引ける『唐書』の文の続きに「或云、日本乃小国、為倭所并。故冒其号。」これはあとかたもなきことなれば、此方の人のいふべきにあらず。彼の国にておしはかりの説なるべし。また或説に『日本』は唐の武后が時にもろこしよりつけたる号なりといふも、ひがことなり。これはかの咸亨元年のころはただ使者の語りしを聞けるばかりにて、まだたしかなることはなかりしを、文武天皇の御世に粟田真人の渡りし時などにもや、書翰などにも書かれてたしかに「日本」といふことを知りけむ。これ武后が時に当たれば、かの国にてもそのころより日本とはいひはじめたれば、それを伝へ誤れるなるべし。

問ひて云はく、「ひのもと」といふは古語か。

答へて云はく。前にいへる如く、もとよりその意はある故に、「日の本つ国」の義にて「日本」ともつけられたれども、「比能毛登」といふ名はなかりしことなり。それは、「日本」といふ文字につきて、後にいひ出でたることなり。この故に古き物に見えたることもなし。万葉にところどころ「日本」と書けるをしか訓じたるは、後人のしわざにて、しひて五言に読まむとする故

の誤りなり。古歌には四言の句も多かるることにて、みな「日本之」と読むべし。第一卷に山上憶良の臣が唐に在りてよめる歌、  
「去来子等いざこども 早日本辺おほとも 大伴乃みつの 御津乃浜松まつら 待恋奴良武まちひぬらむ、また第十一卷の歌に、「日本之やまとのくに 室原乃毛桃むろふのけも 本繁もとげく 言大王物乎いひてしものを  
不成不止ならずはやまじ、このほかもみなかくの如く読むべし。

9 「比能毛登」と読むべき所は、第三卷不尽山の長歌に、「日本之やまとのくに 山跡国乃云々やまのくにの、『続日本後記』卷十九、興福寺の法師の長歌に、「日本乃やまと 野馬台能国遠やまとのくにを」また、「日本乃やまとのくに 倭之国波云々やまとのくに」、これらばかりなり。ただしこれらも国の名にいへるにはあらず。下の「やまと」がすなはち物名ものなの「やまと」なれば、わづらはしく国名を重ねていふべきにあらず。これはただ「やまと」といはむとての枕詞なり。

枕詞とするにつきて二つの意あり。一つには「夜麻登やまと」を常に「日本」と書く故に、その文字の本訓をやがて上に置くこと、  
10 「春日之春日はるひのかすが」「飛鳥之飛鳥とまりのあすか」などつづくる格なり。二つには「日の本つ国のやまと」といふ心に続けるなり。それならば、「日本」と名づけられたる意を取りて名をば取らざるなり。とまれかくまれ枕言まくらごにまがひはなきなり。国号にいふはまた後のことなり。『日本紀』にも「日本」と書かれたる、みな「夜麻登」と訓ませたり。

(本居宣長『石上私淑言』)

〔注〕 ○右に引ける『唐書』…前節に「唐書云はく、日本古倭奴也云云。咸亨元年、遣使賀平高麗。後稍習夏音、惡倭名」  
更号「日本」。使者自言、国近日所出、以為名」とある。 ○唐の武后…則天武后。 ○咸亨元年…六七〇年。

問一 傍線部1の問に対する答えとして適切なものを次の中から二つ選べ。

- a あらゆる国々を照らす日の神の誕生の地であるから。
- b 世界中が仰ぎ見る大御神のまします国であるから。
- c 日本より西の国々から見れば、日が昇る方向にあるから。
- d 自然の摂理にかなっているから。
- e 遣隋使がそう名づけたから。

問二 傍線部2が指すものとして適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 日本書紀
- b 唐書
- c 日本霊異記
- d 隋書

問三 傍線部3はどういうことを言っているのか、次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

- a 中国の史書は、我が国についてでたらめばかり書いてあるので、この記事も信用できない。
- b 中国の史書の我が国に関する記事は誤りだらけだが、この記事は信用できる。
- c 中国の史書が伝える我が国に関するこの記事は部分的には事実かも知れない。
- d 中国の史書は中国に関する記事は信用できるが、我が国に関する記事は信用できない。

問四 傍線部4の意味としてもつとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 反対に我が国では伝承を失ったのだ。
- b 逆に中国では伝えなかったのだ。
- c むしろ我が国では伝えなかったのだ。
- d 予想に反して中国では伝承を失ったのだ。

問五 傍線部5はどういう意味か、次の中からもつとも適切なものを一つ選べ。

- a 後に残らないこと
- b 根拠のないこと
- c 存在しないこと
- d 結論のないこと

問六 傍線部6はどういうことか、次の中からもつとも適切なものを一つ選べ。

- a そう言うのは中国側だけである。
- b そう言うのは日本側だけである。
- c 日本側からそう言うてよいことではない。
- d 中国側からそう言うはずがない。

問七 傍線部7「たしかなること」とは何か。もつとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 日本の国号の名付け親が則天武后であること。
- b 日本が倭に併合されたという記録。
- c 倭という漢字の意味を嫌って日本と改めたこと。
- d 外交文書での日本の国号の使用。

問八 傍線部8は、どう読むべきか。もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a やまとの
- b ひのものと
- c やまとゆく
- d くさかの

問九 傍線部9で言う「ひのもと」と読むべき根拠とは何か。もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 古歌はともかく、時代が下れば定型化が定着したので、五音節で訓むべきだから。
- b 下に続く「やまと」が国名なので、枕詞として訓むべきであるから。
- c 富士山を歌った万葉歌と興福寺の法師の歌だけは日本全体の意味で用いているから。
- d 「やまと」と訓むと繰り返しになり、格調を欠くから。

問十 傍線部10はどういう認識に基づいて言っているのか。もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 「ひのもと」という命名行為が重要であって、名の由来は問題ではない。
- b 普通名詞としての「日の本」であって、「ひのもと」の語が固有名詞として存在したのではない。
- c 「ひのもと」という言葉の語源を正確に理解せずに、「ひのもと」の名を用いるべきではない。
- d 「ひのもと」は、固有名詞として成立しており、語源解釈などは取るに足りない。

問十一 次の中から、山上憶良の歌を一つ選べ。

- a 東の 野にかぎろひの 立つ見えて かへり見すれば 月傾きぬ
- b この世にし 楽しくあらば 来む世には 虫に鳥にも 我れはなりなむ
- c 世間を 憂しとやさしと 思へども 飛び立ちかねつ 鳥にしあらねば
- d 桜田へ 鶴鳴き渡る 年魚市濁 潮干にけらし 鶴鳴き渡る

三

次の文章を読んで、後の問に答えよ。なお、設問の關係上、返り点・送り仮名を省いたところがある。

今夏我京より郷に帰る。友人漱石書を寄せて房州近傍へ海水浴に行きたりと報ず。余戯れに之に贈る書状中に自分を妾と書し漱石を郎君と書す。漱石ついで端書一枚を寄す。之を見るに詩一首を録す。

鹹氣射<sup>テ</sup>顔<sup>ヲ</sup>顔欲

X

醜容对<sup>スレバ</sup>鏡<sup>ニ</sup>易<sup>シ</sup>悲傷<sup>シ</sup>

Y 齡今日廿三歳

1 初被佳人喚我郎

2 一読して殆んど絶倒す。余京に帰る。漱石余に其著す所の木屑録を示す。是れ即ち駿房漫遊紀行なり。余其中の一節を左に掲ぐ。

距<sup>ツルコト</sup>岸<sup>ヲ</sup>数町、有<sup>リテ</sup>一大危礁<sup>3</sup>当舟。濤勢蜿蜒、長<sup>クシテ</sup>而<sup>ル</sup>来者、遭<sup>ヘバ</sup>礁<sup>ニ</sup>激怒<sup>シ</sup>

欲<sup>ス</sup>攫<sup>ク</sup>去<sup>ク</sup>之<sup>ヲ</sup>而<sup>シテ</sup>不<sup>レ</sup>能<sup>ハ</sup>。乃躍而超<sup>ユ</sup>之<sup>ヲ</sup>、白沫噴起<sup>シテ</sup>、与碧濤相映、陸離<sup>トシテ</sup>

為<sup>ス</sup>彩<sup>ヲ</sup>。礁上有<sup>リ</sup>鳥、赤冠蒼脛、不<sup>レ</sup>知<sup>ラ</sup>其<sup>ノ</sup>名<sup>ヲ</sup>。濤来<sup>レバ</sup>則<sup>チ</sup>一搏<sup>シテ</sup>而<sup>チ</sup>起、

低飛回翔、待<sup>チ</sup>濤退<sup>ク</sup>復<sup>ス</sup>于礁上<sup>ニ</sup>。

濤勢云々の数句は英語に所謂 personification なるものにて、波を人の如くいひなし、怒といひ攫<sup>5</sup>といひ躍といふ。是の如きつづけて是等の語を用ゐしは恐らくは漢文に未だなかるべく、漱石も恐らくは気がつかざりしならん。されど漱石固より英語に長ずるを以て知らず知らずここに至りしのみ。實に一見して波濤激礁<sup>はとうげきしょう</sup>の状を思はしむ。

(正岡子規『筆まかせ』)

〈注〉 ○鹹氣…塩氣。 ○駿房…駿河と房総。 ○蜿蜒…うねうねと寄せ続ける。 ○陸離…きらきらと美しい。

問一 文中の空欄 X・Y に補充する語として、もっとも適切なものをそれぞれ次の中から一つ選べ。

X a 斑 b 黄 c 妙 d 厚  
Y a 烏 b 猴 c 馬 d 犬

問二 傍線部 I 「初被佳人喚我郎」の書き下し文として、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 初めて佳人に我が郎と喚ばる
- b 初めて佳人をして我が郎と喚ぶ
- c 初めて佳人の我が郎と喚ぶによる
- d 初めて佳人のために我が郎と喚ぶ



問三 傍線部1「初被佳人喚我郎」の意味として、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 美人がはじめて自分を恋人と認めてくれた
- b 美人がようやく男性を恋人とよびはじめた
- c 美人がやっと自分の恋人と認めたためである
- d 美人が自分のために恋人とよんでくれた

問四 傍線部2「一読して殆んど絶倒す」と記す理由として、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

- a 二十三歳の人が作った詩としては素晴らしい出来映えであったから
- b 男性であるのに女性の気持ちを巧みに詩にしていたから
- c 漢詩そのものの完成度に驚嘆して抱腹絶倒したから
- d 冗談に対して冗談で答える機知がすばらしかったから

問五 傍線部3「当舟」、4「与碧濤相映」の意味として、もっとも適切なものをそれぞれ次の中から一つ選べ。

3 a 舟にぶつかる

b 舟に匹敵する

c 舟の前にある

d 舟の側にある

4 a 白い泡沫が青い波とよい対照をなしている

b 白い波濤が青海原と激しくせめぎあっている

c 白い鳥が青い波の上に浮かんでいるのが美しい

d 白い岩礁に青い波が寄せて印象的である

問六 傍線部5「攫といひ躍といふ」について、イ「攫」、ロ「躍」の内容として、もっとも適切なものをそれぞれ次の中から一つ選べ。

イ「攫」 a 怒張した海面が舟を何処かへ運び去る

b 激流が岩礁にせき止められてもがく

c 泡立つ白波が舟を岩礁にぶつける

d 激しい波が岩礁を飲み込んで持ち去る

ロ「躍」 a 舟がはね上がるように進む

b 波が勢いよく岩礁を越える

c 岩礁が波をせきとめる

d 泡沫が岩礁をはいまわる

問七 筆者が漱石の文章を賞賛した理由として、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a 漱石の漢文が才気煥発かんぱつであり他の追隨を許さぬ重厚さがあったから

b 漱石の漢文が叙景にすぐれ確乎たる表現力を有していたから

c 漱石の漢文が伝統的な修辭とは異なる工夫を用いていたから

d 漱石の漢文が英文に勝るとも劣らない筆力で書かれていたから

